

故ならばすべての児童は活動が好きで演劇的であるからであります。詩的要素も多くの児童の現されない要求でありますが演劇的要素は更に強く児童によつて渴仰されるのであります。

十一、お話の中に含まれるユーモアには如何程の教育的價值ありや。

私の茲に言ふユーモアは普通にいふ滑稽とは別の意義を持つもので單に笑ひを意味するもの

小説 夏子

若葉

一
芳枝さんや三郎さんや恒敏さんがお山の上で遊んで居る。恒敏さんが、いつもの元氣な顔で、顔に汗を一ぱい流して、何だか大層力んで居る。三郎さんが例のおどけた顔をして、小さい目をまた小さくして笑つて居る。こんど新らしく入園した

ではありません。ユーモアは私達に想像力の働きのよつて齎らされた均整感を教へてくれます。ユーモアは児童をしてその論理的機能を發達せしめ匆卒の結論に急がしめない効能を有して居ります。児童に於てはユーモアの發達は極めて遅々たるものであります。急がずに氣を長くその發達を助長してやらねばなりません。(了)

芳枝さんは、白い靴下に茶革の半靴を穿いた兩足をきちんと揃へて二人の傍に立つて居る。其の中に恒敏さんが大きな聲で笑ひながら三郎さんを推した。三郎さんはふざけた手つきをして逃げようとして足がすべつて轉んだ。恒敏さんも其の上へ重なりあつて轉んだ。そのはづみに芳枝さんは足

をすくはれた様になつて倒れた。あらつと思つて手を出さうとする間もなく、芳枝さんのきやしやな體がお山の斜面をころがり落ちた。幼稚園のお山だと思つて居たら其の斜面が大層長い、自分もころがる様にして追ひかけてゆくと、芳枝さんはずん／＼下へ落ちてゆく。ふと見ると下に大きな池がある。幼稚園のお池と同じようでもあるし、大層大い様にも思はれる。兎に角くあの中へ落ちたら大變だと思つて、尙ほ急いで追つかけたが、どういふものか足が充分思ふ様に動いて呉れない。その中に芳枝さんは今にも池に落ちようとする。自分は、大きな聲で『何人かつ』と叫んで身を悶へながら兩手を伸した。すると兩方の手が、それは／＼長く、まるで、あの手長島のお話の中の人の様に長く、さうと伸びて、芳枝さんを抱きとめた……と思つたら目がさめた。

夏子は此頃こんな夢をよく見る。初めて幼稚園へ就職した頃にも、こんな心配な夢をよく見た。

受持ちの子供が保育室のドアで指をしめられた處や、ブランコから落ちた處や。そんな恐ろしい夢ばかり見て、翌日幼稚園へ行つて其の子の無事な顔を見るまでは、心配で心配でたえられなかつたものである。その後、次第に幼稚園に慣れて來ると、そんな夢は殆んど見なくなつた。そして、毎日々々精一ぱいに仕事が出来、精一ぱいに子供と遊ぶことが出来て、夜は疲れ切つて心よい熟睡に入ることが出来た。それが又此頃になつて、どういふ譯かじやな夢ばかり見る様になつた。但し目がさめてから後は、夢だといふことがよく分つて居て、以前の様に「若しやほんとうだつたら」といふ様な現實化された心配は起らない。しかし、いつも何となく重苦しい變に疲れた様な悪い心持だけが後までついた。

夏子は起き上つて机の上の時計を見た。その時に昨夜も遅くまで書き直し書き直して、とうとと書きずに終つた、先生へ宛てゝの手紙の書きか

けが目についた。そして、冴えない眉を尙ほ曇らしたが、そのまゝ床を離れた。

夏子はお母さんと二人で郊外の小さな家に住んで居た。夏子は此頃の若い女にしては感心といつてよい程にお母さんに優しくかつた。しかも夏子に對するお母さんの愛は、いふ迄もなくそれ以上であつた。殊に四年前に一人の姉を遠くへ嫁けてから、母一人子一人の愛情は尙一層の濃密を加へた。夏子はどうなにも面白くない日でも、お母さんの傍に居れば楽しかつた。どつちかといへば無口の方の夏子はお母さんとも餘り口數多い世間話などもしないけれども、お母さんが針仕事などして居られる傍に坐つて居る時には、ぢつと黙つて居ても心は淋しくなかつた。さういふ時お母さんの方は心が淋しくないといふ丈では物足りなかつた。お茶でもいれようかねえと言つては、立つて行つて、茶箆筒からかきもちの罐などを持ち出して來て娘にすゝめた。夏子は甘いものよりもこん

なものの方が好きであつた。それを知つて居るお母さんは、築地の親類などへ行つた歸りには、わざとあつちへ廻つて、たまるやのかきもちを買つて來た。日曜の午後など、母子はよくそれをつまみつまみ罪もない話をした。

その優しいお母さんは、娘の出勤を遅れさせない様にと、朝の勝手の用を一人でして呉れた。そして朝々の膳のものなども何彼と氣をつけて少しでも愉快に、少しでも心持よく娘の出勤を送り出すようにと心を用ゐた。夏子は毎朝それを有り難く思つた。そしてお母さんと相對して食臺に向つて居る間は、此頃の悪い癖になつたいやな寝起きの心持ちをもすつかり忘れて仕舞つた。

併し、家を出ていざ幼稚園へ行くとすると、心が妙に進まなくなる。あの推し込められる様に立つて居なければならぬ満員電車を考へるのもいやだつたが、それよりも幼稚園に行くといふことが暗い笠の様に頭を壓した。それでもお母さ

んにそんな氣振りでも見せて心配させては濟まない。今朝も夏子は風呂敷包みを持つて、元氣よさうに行つて參りますを言つて、家を出た。

二

今朝は夏子が一番早かつた。廊下の硝子戸をあけて居た小使の爺やが、いつもの威勢のよい聲で『先生お早う御座ります』

と言つた。此頃の夏子には此の年寄りの始終快活に屈托のない働き振りや話しの調子が不思議の様にも思はれ、又非常に尊いものにも思はれてならなかつた。そして心にいろ／＼のことを感じれば感じる程、ものゝ言へなくなる夏子は、たい一寸笑顔を向けて。

『お早う』

と簡単な答へをしたまゝ、職員室へはいつて、自分の椅子に腰をかけた。そして目の前の大戸棚の障子戸に映つて居る自分の姿を見て、殆んど無意識的に頭へ手を上げて髪をなほして居たが、ふと

氣がついて、立つて行つて窓のカーテンを開いた。窓の外には八つ手が大きな葉を擴げて茂つて居た。夏子はものに恐じる様な目でちつとそれを見て居た。其の時入口のドアが開いて藤野がはいつて來た。

『お早う。大層お早いのねえ、私當番なのにこんなに遅れて仕舞つて。』

『私も今來たばかりですの。』

『家の遠い方かたの方が早くて、近いものが遅いなんて逆さねえ。』

『藤野さん、その大きな包みは何に。』

『これ。あて、御覽なさい。』

藤野の黒目がちな睫毛の長い目がにこ／＼と笑つた。

『分りませんのね。』

『まあ當て、御覽なさいな。』

此の人の無邪氣な、あとけない態度には、夏子の心もいつか解けた。そして、窓を離れて藤野の

傍へ来て、

『さはつて見てもいいでせう。』

と笑ひながら言つた。藤野は手を舉げて遮りながら、

『さはつては駄目。さはつたりすれば直ぐ分るものなのなんです。ひつくりなさつては、いけませんよ。』

といひながら、包みを解いた。

『あらまあ。』

包のなかは鶏であつた。包みを解かれた鶏はぐつと首をのばして、ばた／＼と羽ばたきをした。

藤野は風呂敷を持つたまゝ驚いて肩をひいたが、

夏子と目をあはせて、いつもの朗かな聲で笑つた。

『どうなさつたの。』

夏子も餘りのことに吹き出した。

『今日私ひよつこのお話をしようと思つて、その時これを皆に見せようと思つて。父は大事の鶏なんです。いけないうつて言つたんですけれど、

私無理にそういつて持つて來ましたのです。ですけれど途中電車の中なんかで啼き出されたら困るでしょう。だから今朝歩いて來ました。前の籠がまだ物置にありますねえ。あれへ入れてやりましょうと思つて。』

夏子は、お話の材料として、わざ／＼鶏を、しかも其の爲に歩いてまで持つて來る藤野の熱心が深く感ぜられた。そして、自分より歳下とじたの、此の無邪氣な藤野に較べて、經驗もちつとは餘計あり、待遇も上にされて居る自分の此頃の心持ちはどうしたことかと、自ら責めないでは居られない氣が起つた。そして、藤野に手傳つて鶏の籠を出しに行かうとした處へ、主任の石岡と木田とが來た。そして、もう一度皆で鶏を圍んで笑つた。しかし、驚いた鶏が妙な足取りで、きちんと片づいて居る主任の机の上に歩いて行つた時、潔癖な石岡の眉の邊に一寸黴がよつた。敏感な夏子にはそれがすぐ分つた。藤野は一人で籠を出しに行つた。

今日は夏子の組に缺席が二人あつた。其の一人は芳枝さんであつた。従兄の三郎さんに、どうなすつたのでしょうかと聞いても、知りませんと答へた。夏子は何だか氣になつたが、忙しい朝の保育でいつかまぎれて仕舞つた。

夏子は皆に折り紙を配つた。いろ／＼の色を子供の好きなまゝに撰ばせながら配つた。そして『今日は皆さんの好きなものを自由に折つて御覧なさい。』

と言つて、自分は何の氣もなく紫と白とを二枚ぬいて手に持つた。

一人の男の子が

『先生、なゐに。』
と大きな聲を出した。

夏子はこのつと笑ひながら皆を見廻しておいて、靜かに其の子の傍へ行つた。そして首を軽くかき上げて極く小さい聲で、

『何を折りませう。花を折りませうか。』

と話しかけた。さつきの大きな聲に驚いて一齊にこちらを向ひた子供達も、再び靜かに銘々の折り紙を始めた。

『花なら赤でなくつちやあ』

男の子の聲は、今度はずつと低かつた。しかも、夏子自身の耳へは、この方が強く響いた。

夏子は此頃、子供のいふことが、妙に氣にかつた。今迄不用意に聞き流した様のが、妙に六かしく考へられて來た。今も、此の子供の言葉が、夏子の頭の中へひつかつた。夏子の頭の中には、初め何の考へもなしに花を折りませうかなどと、いはゞ口から出まかせなことを言つたのが非常に悪いと責めて居るものがある。それと同時に、紫の藤の花、白い百合の花といふ二つの觀念がいやに反抗的な氣分をとつて起て居る。又一方には、花ならば赤といふ子供の簡単な併し純な斷定を、どうすなほに受取つてやらうかといふ心持

ちも湧いて居る。

此の時入口の戸があいて、校長が參觀人をつれてはいつて來た。夏子は其の音にびつくりした様に頭をあげたが、すぐ立つて校長の傍へ行つた。

そして今折紙をさせて居ますといふことを告げた。校長は參觀人に何か説明しながら、あつちこちと室内を見廻して居たが、不意に遊園の方で子供の笑ひ聲が大きく起つた。それと共に鶏の馳けながら啼く聲が聞えたので、校長は參觀人と共に其の方へ出て行つた。

四

お晝前から急に曇つて來た空は、ポツ／＼と雨になつた。その爲に午後には子供達を室内で遊ばせた。歸りの時刻には子供の家から傘や足駄や外套などを持つて迎へに來た。平生でさへごた／＼するお歸りが今日は一層騒ぎをした。保母は皆忙しく子供達の世話をしてやつた。

夏子も甲斐々々しく自分の組の子供を皆歸し

て、ほつと息をする様な氣持で玄關の柱へ倚りかかつて立つた。他の保母が職員室へはいつて仕舞つた後までも一人で立つて居た。

夏子は急に耳の中がしんとする様な氣がした。今迄のにぎやかさに引きくらべて、あたりが總べて深山の奥で、もあるように靜かであつた。夏子は其の靜寂の中で、自分の心臓の鼓動が聞える様な氣がした。のみならず、自分の鼓動が其の靜寂の中へ波動してゆく様に感じた。仕舞ひには自分がその靜寂の中へ溶けて消えてゆく様な心持ちがした。すると其の次の瞬間には、何故とも知らず眼の中が潤んで來た。

夏子は、ゆうべの手紙を思ひ出した。夏子には最も心服して居る一人の恩師があつた。それは女學校の時の受持の先生であつた。それから卒業して後も、始終何彼と指導を受けて居る。夏子が幼稚園保母になつたのも其の先生のおすゝめがあつたからであつた。先生は夏子の母さんと同じ様に、

若い時からの未亡人で、夏子よりは年下ながら一人のお嬢さんがおありだつたりして、夏子の境遇や心持ちに充分な細い理解を持つて下さつた。夏子は自分の精神上の問題に就ては、何事でも教へを受けて居た。殊に先生は浄土真宗の美しい信仰を持つて居られて、別段更まつて信仰の話をせられるといふことは滅多にないけれども、折にふれ時にふれ、親鸞上人のお話や、嘆異鈔の中の言葉などが、先生の口から漏れることは少くなかつた。さういふ時には、夏子は殆んど酔はされる様な心持ちで其のお話を伺つた。そして、信仰といふ處までは、まだく行かないけれども、純美なる絶對他方信仰の生活の高貴さは若い夏子の心を強くひいた。

夏子は此の間から、自分が保姆として少しも適當な資格のない人間でありますから、それを辭したいといふことを、此の先生の許へ書きかけ書きかけしては書けないで居るのである。夏子は此の半

年程前から自分の毎日して居ることに、何んだか、つかまへ處がない様な氣がして來たのである。つかまへ處がなければ力の入れようもない。力の入れようがなければ心の張り様もない。勿論、それは今始つたことではない。今迄一度だつて、つかまへ處があり、眞に力を入れて居たのではないが、前にはそれを何とも心づかずに過ぎた。此頃それが氣がついて來たのである。氣がついて見ると苦しくてたえられない。同じ苦しいと言つても手答へのある苦しさならば忍ぶに張りもあるが、此の苦しさは何と形容してよいか分らない、いやな苦しさである。人からはどう見えるか知れないけれども、自分のして居る日々の保育が、勿論、わざとなまけて居るのではないが、ちつとも力の籠つた、ほんとうに眞劍のものではない。之れではないと思ふけれども、どこに力の入れようも張りようもない。こんな風であるから自分のして居ることを、よいなり悪いなり、兎に角く自分では

つきり見つめ度いと思つても、それが出来ない。

自分は毎日何かして居るようだけれども、凝視すると其の正體が分らなくなる。夏子は此頃始終こんな悶へにじらされて居るのである。疲れると言つても、うんと力を入れて疲れるのなら心持ちがよい。其の疲れには一種の快感さへ伴ふ。しかし、併し、夏子の疲れは影を追つかけて捉へようとして居る人の様な空虚な疲れである。

自分に張り合ひがない。こんな有様で仕事に何の感興が起らうぞ。夏子は決してなまげはしない。勤務を怠りはしないけれども、自分自身では濟まない様な心持ち許りして居る。それを皆先生へ申上げて叱つて頂くなり、斷然保母を辭するなり、きつぱりしたことにしたいと思ふのである。しかし、自分でも捕捉し難い此の心持ちは、中々筆には書きあらはせない。それに、自分を信じて、毎日専念に勤めて居ると思つて喜んで居て下さる先生に、此の不甲斐ない有りのまゝを申上げるのが、

いかにもつらいと思ふ心も手傳つて来て、手紙はいつでも書き直し許りした。昨夜も幾度か書き直し、書き直して、とうとう疲れて寝て仕舞つたのであつた。

職員室でにぎやかな笑ひ聲がした。夏子は、はつと自分にかへつて柱を離れた。そして、さつき子供が落して行つた紙屑を拾つて、それを持つて職員室へはいつた。

五

芳枝さんが入院したといふことを聞いたのは、それから七日許りたつて後であつた。あの日以来芳枝さんは續いて休んで居て、屈書で病氣とは知つて居た。しかし、別に大したこともあつたと思つたし自宅へ見舞ひにゆくのも夏子の性質には非常におつくうであつたので、氣にはなりながら打過ぎて居た。處が三郎さんのお迎ひの女中から、昨日急に御入院で、随分お重い御病氣で大層おやせになりましたさうで御坐いますといふこと

を聞いた時、夏子は非常に驚いた。そして、緑色のさつぱりした洋服を着て、お垂髪さびの横の方に洋服と同じ色のリボンを蝶々に結んで居る、おとなしい芳枝さんの姿が目の前に浮んだ。

其日幼稚園が終ると直ぐ夏子は病院へ見舞に行つた。看護婦に案内されて病室の前へ来た時に夏子は胸がおされる様な気がした。病室の入口にある高森芳枝殿といふ札を見たゞけで、夏子の目は涙ぐんだ。ノツクすると、中から上品な聲で

『どうぞ』

といふ答へがあつて、靜にドアがあいた。

『……………』

と、期待しないうれしさに先づ夏子を迎へたのは、芳枝の若いお母さまであつた。

『どうも誠に恐れ入りました。芳枝さん、うれしいでせう。先生がいらしつて下さつて、さあ、どうぞ、こちらへ……………』

と、芳枝の枕に近い處で椅子をすゝめた。

夏子は丁寧ていねいに頭をさげて、先づ何と言つてよいか口ごもつた。一寸見たゞけで、芳枝さんは思つたよりも重症らしいのである。雪白の上包みをした軽い毛布を胸の邊までかけて、寢臺の上におとなしく仰向けに寢て居る芳枝さんの頬は、見るにたえない様に瘦せて居る。前から白かつた顔色は、血色が消えて青味を持つて透き通る様に見える。目だけは却つて大きく見えるが、あの澄み透つたばつちりとして鈴の様に張りのあつた、美しい目が、だるさうに衰へて居る。夏子は其の目をぢつと見て、

『芳枝さん……………』

といた切り、あとが言へなくなつた。そしてお母さまの方へ向いて、

『さぞ御心配でいらつしやいましょう。御入院遊ばしてから、少しでもおよろしいので御坐いますようか、』

と、初めて見舞の言葉を述べた。

夏子は持つて來た麥藁細工を出して、芳枝に見せた。そして、

『芳枝さん、早くよくなつて幼稚園へいらつしやいねえ。』

と言つた。芳枝は黙つて先生の顔を見て居たが、

『いゝことねえ。お禮をおつしやるんでしょう。』
といつてお母さまが其の麥藁細工を受取つて、芳枝の右の手に持たせると、芳枝は先生の顔を見たまゝにこつと笑つた。

夏子は側を向いて、そうと目を拭つた。室内が餘り濕ばいので、にぎはさうと思つたのか、看護婦が活潑な、しかし優しい聲で、

『きれいで御坐いますねえ。お嬢さんも幼稚園でこんな奇麗なお拵へになりますのですか。私に一寸拜見させて下さいましな。』

と言つて、その麥藁細工を芳枝の手から取つて、さも面白さうに、自分の顔の前で、くるくると動かして見て、寢臺の頭の處へ、芳枝に見える様に、

さした。

その間も芳枝は先生の顔ばかり見て居た。そして時々微かに笑顔をした。

夏子は、女中がお茶をついで出したのをきつかけにして、芳枝の目と自分の目とを離した。そして、丁寧に皆に暇を告げて、芳枝の肩の邊へ軽く一寸手をやりながら、

『では、また遊びに参りますよ』

と言つて病室を辭した。そしてことわつてもく送つて來て呉れたお母様と分れて、病院の玄關を出た。(つづく)

○フレイベル紀念會

先月廿一日のフレイベル紀念會は、午後三時より東京女子高等師範學校附屬幼稚園に於て催され、倉橋惣三氏の『フレイベルを憶ふ』と題する講演ありたり。

○日本兒童學會總會

本月十四日(日曜)午前八時半より東京醫科大學法醫學教室講堂(赤門を入り突き當り)に於て開會兒童學上の諸講演ある筈。聽講隨意なり。